夜の木

保科　弥生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜の木

【Ｎコード】

Ｎ６８６３Ｉ

【作者名】

保科　弥生

【あらすじ】

植物と話ができる少年が、希望を失ってしまって夜を真っ暗にしてしまった「夜の木」をよみがえらせるために、さまざまな人の人生を垣間見る物語です。

夜の木

保科弥生

僕は、生まれたときから僕の回りにいる木や草、花と話すことができました。

ほかの子供たちにはそれができなくて、でもそれが自然なのだと気づくのに、ずいぶんかかりました。僕が話のできる木や草と、話せないのが普通なのだと。

でも、僕は周りの皆と話ができることがうれしかった。だから、ほかの子供たちに馬鹿にされても、区別されても平気でした。いじめられても、必ず助けてくれる大きな木がいてくれたし、転んで怪我をしたときは、葉っぱを差し出して「これを使いなさい」って言ってくれた薬草たちもいたからです。

そんな僕が、「地球」と話ができるようになったのは、僕が十五歳の成人式を終えた直後でした。成人式のお祭りのあと、ザワザワと揺れる麦畑を通りながら、傍をかすめて行く風に心地よい安らぎを感じながら僕は歩いていました。太陽はもうとっくに沈んで、暗闇があたりを支配していましたが、不思議と怖くなかったのを覚えています。そうしていると、ふと、風の中から声が聞こえました。ひゅうひゅうと音を立てる風が、人間の声のような音を立てて僕に話しかけてきました。

「さあ、空を見上げてごらん。」

風はそう言って、僕の耳元から吹き去っていきました。

僕が空を見上げると、今度は地面から、ぼそぼそと声が聞こえます。

「星は見えるかい？月は見えるかい？」

僕は、首を横に振りました。

月も、星も、いつもなら月に照らされて浮かんでいる光る雲も何もないのです。
「今日は満月。満月の夜に月がない。君は不思議に思うかい？」
満月の夜に月がない。そんなことは考えられなかった。僕はよく、足元を照らす程よい光に導かれて、満月の夜はたくさんの草木や花と話しながら散歩を楽しんでいたのに。
それでもこの暗闇は怖くない。僕は不思議な気持ちになってきました。
「月の女神が君を呼んでいるよ。君たちに届かなくなってしまった月の光を、取り戻してほしいと嘆いているよ。さあ、行ってやってくれないか。君にならきっとできるから。」
「月の女神様のところへ僕が行くの？どうやって？」
僕の疑問に、地球はそこらじゅうに声を飛ばして笑いました。
「目を閉じてみろ。」
耳元で、男の人の声がしたので、その力強い声にしたがって、僕は目を閉じてみました。すると、僕の体から一気に重さが抜けて、足は地面から離れて、風の中に地球の声がこだまする夜空の中を、泳ぐように、宙に浮いて、風を切って、どこか遠くへと導かれていくのでした。
「さあ、もういい。目を開けてみろ。」
さっきの男性の声が耳元でささやきました。
僕は、足が地面のようなところ…あまりに柔らかいから地面とは思えなかったけれど…その上に自分の足がついているような感覚がして、早く目の前に広がる世界を見てみたいと思い、そっと目を開けました。
でも、そこにはきれいなものも楽しいものも、なにもありませんでした。
あったのは、僕の目の前に広がる真っ黒な草原と、その先にある暗闇の塊でした。
「あれは森だ。そして今、お前が建っている場所、それは、水の上

だ。」
振り向いても、どこを探してもその声の主は分からない。ここにはいないどこかで、遠くから声を飛ばして僕にささやきかけているのだろう。
ぼくは、その男性の声に言われるとおり、足元を見ました。
そして、驚きのあまり言葉を失ってしまいました。
僕の足は水面の上にあって、流れる水が河となって森のほうから流れてきていました。水は穏やかでどこまでも透明でした。本当ならば月や星を映してきらきら光っているはずの透明な水面。その下には小さな魚が泳いでいました。
「その川の源流は森の中にある。その森の中の源流には大きな木が立っている。その木のところまで、水の上を歩いていくといい。そこに月の女神がいる。それと、水の上は走るなよ。水が乱れて溺れてしまう。」
声は、そういいながら風のようにサアッと消えていきました。
いままで僕に常に寄り添っていてくれた地球の感覚が、声と一緒に遠くへ行ってしまいました。僕は、急に寂しくなって、思わず早足で水の上を歩いていました。一歩、一歩と進むのですが、どんなに焦って歩いても森は近づいてきません。僕は、いよいよ寂しさに耐えられなくなって、ついに水の上を走ってしまいました。
すると、走り出して勢いよく水の中に突っ込んだ足が、水の中に沈んでしまい、僕の体はどんどん飲み込まれてしまいます。思ったよりも川は深く、あっという間に僕の体は水の中に沈んでしまいました。息ができなくなって、苦しくなって、水の中でもがきました。すると、水の上から、僕より大きい腕が出てきて、バタバタと苦しむ僕の体を一気に引き上げて地上に下ろしてくれました。
「人間は、この草原を歩けない。だから水の上を歩くしかないんだ。」
助けてくれた人は、そう言いました。
水をたくさん飲んでしまった僕を助けながら、彼は僕を立たせて、

今は静かになった水面へと担いでいってくれました。
深い瑠璃色の澄んだ瞳を持った、真っ黒な髪の毛の男の人でした。男の人に見えたけど、この草原を人間が歩けないのに、堂々と歩いている彼は、人間ではないのかしら、と、僕は不思議に思いました。
彼に担いでもらい、水面までつく時間、僕の心から次第に寂しさは消えていきました。
以前のように地球が寄り添ってくれている感覚が体に蘇ったからです。
瑠璃色の瞳の男性は、僕が水面に足を下ろして静かに歩き出すと、草原を僕に付き添って歩いていってくれました。
森に着くまでの間、僕は彼といろんな話をしました。僕のこと、彼のこと。話すとどんどん気持ちが楽になってきます。彼は、僕のどんな小さなことでも聞き漏らさずに聴いてくれたし、僕は、彼のいろんなことが知りたかったのです。
この草原を人間が歩くことができないというのは、人間自身の「業」という、いやな考え方や、いけないことをした報いが固まってできたからだ、と、彼は言いました。この草原の草は、その嫌な部分の影響を受けて、刺のように硬く、鋭く育ってしまったのです。そして、その硬い草の草原に、あの森に住む月の女神様は閉じ込められてしまっているのだと。そして、夜空から月が消えてしまったある日、この草原が一気に夜空を多い、数多の星を人間の目から隠してしまったのです。
僕は、そんな話を聞いて、かなしくなりました。
きれいなもの、美しいものを求めるあまり、人は人を傷つけます。
豊かな土地、安らぎの日々を求めるあまり、人は人と殺しあいます。
そう、彼は言いました。
それを「業」というならば、人は、自分たちの手で、自分たちが一番大切にしているものを消してしまっているのだから、とも。僕にはよく分からなかったけれど、よくないことなんだということは

分かりました。
森に着いたのは、そんな話もたけなわの時でした。
森の中につくと、水の道はくねくねと急に曲がり、滝のできているところや岩場などを通っていかなくてはならなくなりました。僕は足元に気を使いながらも、それでも滑ってしまったり転んでしまったりしたので、常に助けられながら歩いていました。黒い影になった木や草が入り組んでいて、自分が今どこにいるのかも分からない。確かにここは普通の森ではない、と、思いました。
瑠璃色の瞳の男性は、しばらく森を歩くと、そこで僕と別れました。あと三歩、歩けば、森の中の開けた場所に出る。そこに月の女神様がいると言って、彼は去っていきました。
まだ名前を聞いていなかったけれど、それでも僕は、ここまで付き添ってくれた彼がどんな人物なのか、なんとなく分かりました。
さよならの挨拶をして彼と別れ、僕は勇気を持って、ひとりでその先に進みました。
すると、本当にそこで森は開け、いく筋かの水の流れに満ちた柔らかい下草に包まれた広場が見えました。その中心には水の湧き出る泉があり、それを守るかのように大きな木が立っていました。
そして、そこには確かに月の女神様がいました。
大樹に寄り添いながら、美しい金の髪の女神様は、眠っていました。体からは淡く弱弱しい光がにじみ出ていて、とても美しいのに、悲しそうでした。
「女神様。」
僕は、女神様の傍に行って、呼んでみました。
すると、女神様は瞳を開けて、木の幹に寝たまま僕に微笑みかけてくれました。
優しい微笑でした。でも、よく見ると苦しそうです。
「ずっと、地球と話をしていました。」
美しい女神様は、そう話して僕に握手を求めてきました。
苦しそうな女神様の手をしっかりと握り返すと、その暖かさに僕

は何故か涙が出てきました。女神様は美しくて、優しくて、お母さんのように僕をやんわりと包んでくれたのです。月の女神様の光はとても暖かい光でした。

「少年よ、あなたがここに来てくれることを、私は知っていました。地球の意識を通して、あなたがここに来るまでのことも知りました。どうか、私の願いを聞いてくれますか？」

「女神様が、僕に願い事ですか？」

「はい。私は、見てのとおり動けません。業の草原の毒を受けて、今にもその毒が全身に回って、再び目を覚ますことができなくなってしまうでしょう。だから、動けない私の代わりに、あなたにやってほしいことがあるのです。」

「僕に？女神様がこんな風になってしまっているのに、僕みたいな平凡な人間にできることがあるんでしょうか？」

「ありますよ。」

女神様は、笑って言いました。

「地球の草や木、花たちとお話ができるあなたには、いろんな人間、いろんな生き物、いろんなものの気持ちが分かるはずです。それらが持っている本当の…本当の気持ちを、この大樹に教えてあげてほしいのです。今は、あなたが話しかけても何も答えてくれないでしょう。この木はずいぶん前から花を咲かすこともなく、実をつけることもなくなってしまったのです。それも、全て地上の生き物が空を見上げなくなったと、地上の生き物が「業」に溺れてしまって悪いことしか考えなくなってしまったとこの木が思い込んでしまったためなのです。だから、少しずつでいい。この木が再び地上を眺めたいと思えるようになるまで、地上のあらゆる『いいもの』を探して、この木に伝えてあげてほしいのです。それに、私の体にめぐっているこの毒も、この木の実を食べれば跡形もなく消えてしまうでしょう。時間はたくさんあります。あなたのやり方で、あなたらしく、この大樹とお話をしてみてください。」

「それが僕にできること、ですか？」

「そうです。」
「でも、女神様、時間は本当にあるのでしょうか？女神様のお体は大丈夫なのですか？」
「あなたの心配には及びません。毒がこれ以上回らないように、地球が私を守ってくれているのですから。」
「地球が？」
「はい。私たちは何億年も昔から、固い絆で結ばれてきました。兄弟のように、時には友達のように思ったこともあります。それがいつしか愛に変わり、私たちの意識は溶け合って、やがて夫婦となりました。夫である地球は今も、全力で私を守ってくれているのですよ。だから、あなたも安心なさい。私を、この星、地球を信じて、あなたのなすべきことをしてください。」
「わかりました。」
女神様は苦しみながら一生懸命に話してくれている。
僕は、そんな女神様をこれ以上苦しめたくなくて、質問するのをやめました。
正直な気持ち、僕は、不安でたまりませんでした。女神様でさえも自由にならなくて、心を閉ざしてしまった大樹を、僕なんかが元に戻せるのだろうかと。
でも、やるといったからにはやらなきゃいけない。それは僕がここにいる理由だし、僕にしかできないことだったから。僕にしかできないのだったら、やれるのは僕以外にいなかったから。
僕は、女神様に礼をいい、ありったけの勇気を振り絞って目の前に聳え立っている大樹と向き合いました。すると、女神様は再び眠りにつきました。
「はじめまして。」
大きな声で、僕は大樹に呼びかけました。心の中でも、いつもほかの皆にやるように何度も何度も呼びかけてみました。でも、大樹からは何の返事も返ってきません。むしろ、僕の言葉も心の声も、みんな大樹には届かなくて、届く前に消えてしまっているような感

覚を覚えて、僕は一気に寂しくなりました。
やっぱり、月の女神様の言ったととおり、木は何も答えずに沈黙していたんだ。僕たち地上の生き物を信じられなくなって、ついには女神様にさえ心を閉ざしてしまった…。
そんな大樹に、ぼくはどうやって「皆が本当に思っているいいこと」を伝えたらいいんだろう。僕には何の力もない。植物と話ができるだけ。こんな大きな木の前に突っ立って何もできない僕は、とても情けなくて、ちっぽけに思えました。
「無力でちっぽけだって？そんなこと、誰が君に言ったんだい？」
ぼくが落ち込んでいると、どこからか声がしました。
「誰？」
「誰って？うう～ん、いい質問だよ！僕は泉の精さ。君の事はよおく見えるよ！君が今考えていることも何もかも。このきれいな泉には全部映し出されちゃうんだからね！」
森の広場をあちこちと移動しながら、声は続けました。
「君に力を貸してあげるよ！ぼくも、この『夜の大樹』のじいさんがだんまりを決め込んじゃってからはすごく困っていたんだ。僕の大好きな月の女神様も、業の草原で毒にあたっちゃっただろ。僕も君も女神様を助けたい。目的は一緒だ。どうだい？まず、僕のいる泉においでよ！この木の脇から湧き出ているよ！泉の周りをこのじいさんの根っこが大事に守っているからすぐ分かる。さあ、おいで！」
僕は、泉の精の言うとおりに、大きな木の幹をぐるりと回って、泉のあるところまで行きました。なるほど、泉を大事に抱えるようにして木の幹が水を囲い込んでいます。
「この泉の水はね、この木の根の枠の中でゆらゆらゆれている限り、この世界で一番純粋な水なんだ。だから、この月の女神様の森に沸いて出ているときはね、不思議なことが起こるんだ。そら、木の根元に座って足を泉の中につけてごらん。そして目を閉じるんだ。そうすると、いままで月の光に照らされていた地上のいろんなことが

見えるよ。」

僕は、泉の精に言われたとおりに、木の根に座って泉に足を入れてみました。きれいに澄んだ水は、思ったより冷たくありませんでした。

目を閉じると、最初は暗闇しか見えませんでした。でも、しばらくすると、遠くのほうから声や音楽が聞こえてきました。そのうち、それはどんどん大きくなって、やがて目を閉じたままの僕の目の前にいろんなものが見えてきました。

最初に見えたのが、子供たちでした。僕よりも少し小さい子供たちがたくさんいました。

よく見ようと思って目を凝らしていると、どうやら何人かの子供が、よってたかって一人の男の子をいじめているようでした。いじめられた男の子は、石を投げられたり体に落書きをされたりしていました。それを、遠くで腕を組んでいる男の子がうれしそうに見ています。やがて、いじめが済むと、子供たちはそれぞれの家に帰っていきました。いじめっ子のなかで、いじめっ子をたきつけていたさっきの子供も、暗くなっていく空を見ながら帰りました。ひとり、また一人と仲間と別れて行き、男の子は一人ぼっちになりました。

僕は、その男の子がすごく寂しそうに見えました。

男の子は、ふと立ち止まり、帰り道にあった公園でひとり、ブランコを揺らせていました。そして、夕日が沈む空に一番星を見つけました。

本当は、いじめなんてどうでもよかった。最初にいじめを始めた奴が、いつしか集まって自分がリーダーになっていた。一番声が大きくて一番体ががっちりしていたから。だから、やめられなかった。誰かをいじめているのは嫌だった。でも、一人ぼっちはもっと嫌だった。だからいじめを続けていた。家に帰っても誰もいない。お父さんとお母さんの顔をした意地悪な奴が、「お前は一番になれ」っていつもいつも同じことを言っている。なんでも一番になって、一

番いい学校に行って一番いい大人になるんだって。
でもそんなものはどうでもよかった。
一番星は嫌いだ。
いつも、一番星にたとえられて、嫌な奴らが僕を部屋に閉じ込めて勉強ばかりさせる。ご飯をたくさんかきこみたくても、お行儀よくしないとご飯はあげないよと怒られる。怒られてばかりで疲れた。
一番星は嫌いだ。
でも、夜になると空いっぱいに広がるいくつもの星は好きだった。
一番じゃないけれど、それぞれが違っていた。赤かったり、青かったり、大きかったり、小さかったり。夜、星空を見上げるのがいつしか習慣になっていた。

僕がそこまで彼の心の中を覗き込むと、今度はほかの光景が目の前に映りました。
夜になっても昼間のように明るい都会のビルの真ん中で、オアシスのようにできた公園がありました。そこに一人の女の子がお母さんと一緒に夜空を見上げていました。

星がいっぱいあって、月がとても煌々と輝いていて、その光に照らされた夜光雲が空を行き交うところをこの目で見たい。
お母さんのふるさとにはそういう場所があるのよって、お母さんは言っていた。
でも、お母さんは私が生まれてから一度もそのふるさとに帰ってはいない。私を一人で育てるためにお母さんは忙しい。だから、ふるさとのおじいちゃんやおばあちゃんとは贈り物や、たまにかかってくる電話でしか触れたことがない。
おじいちゃんに会ってみたい。おばあちゃんに会ってみたい。
そして、絵や写真ではない本当のお星様を見てみたい。
だって、夜でも明るいこの場所は、星の光が町の明かりに負けて見えないから。

ねえお母さん、どうしたらその夢はかなうのかな。私ががんばって、お母さんが忙しくならなくなったらふるさとにいけるのかな。

そんな話をしている女の子を見ていると、また風景が変わりました。

何度も何度も風景は変わり、そのたびにいろいろな人の、いろいろな物語が見えてきました。

彼氏に振られて泣きながら星空を見上げた女性。その彼氏とはよく星空を見上げて星座の話をたくさんしました。

タバコの煙を吐きながらビルの屋上で休んでいたミュージシャン。あまり星は見えないけれど、見上げた月が心を癒してくれました。同じ月を、故郷にいる古い友達や家族が見ているかもしれないと思うと、忙しくて寂しい都会の生活に安心が戻ってきました。

僕は、いろいろな人のいろいろな話を覗き込むたび、心にいろいろな感情や意見を抱いていきました。悲しかったり、うれしかったり、ほっとしたり。まるでその人、本人になったかのようでした。

しばらくいろいろな映像を見ていると、ぼくはだんだん眠くなってきました。

それが分かったのか、映像を見ている僕の頭の辺りから、泉の精の声がしました。

「そろそろ眠くなってきたかい？じゃあ、目を開けなよ。夕食を食べて、寝るといい。」

僕が目を開くと、僕の近くの草原の上に、いくつかの木の実が用意してありました。僕は、見たこともない木の実を食べました。どれも食べたことのない味でしたが、とてもおいしい木の実でした。

僕が食べ終わると、泉の精は、僕がいる泉の近くの木の根元にある柔らかな草原の上に、木の枝や草の葉で作ったやわらかいベッドを用意してくれていました。

「君は、これから木が目覚めるまで、毎日こうやって泉の中の映像

を見て、木の根元で眠るんだ。そうすれば、君の中に入っているたくさんのお話が、この大樹のじいさんの夢になって根っこから木の葉の先まで流れていくよ。」

泉の精の話が終わるか終わらないかのうちに、ぼくは疲れて、眠っていました。眠っている間、僕はとても安心していました。とてもあたたかな母さんの腕の中にいるように、何かに守られているように感じました。そして、木の気持ちを感じました。

木は、決して周りを拒んでいたりはしない。僕の持ってきたいろんな人たちのいろんな感情、いろんな話をもっと聞きたかったのです。木は、眠っている僕に優しい歌を歌ってくれました。その代わり、僕は、さっきまで僕が記憶の中に持っていた、たくさんのお話を木に聞かせてあげたのです。

次の日も、その次の日も、ぼくは、おいしい木の実を食べて泉に入り、また木の実を食べて木の根元で寝ました。そして何度も木とお話をして、木の歌う音楽を聴きながらねむりにつきました。

すると、少しずつですが、地面近くに下りている木の葉が緑の色を取り戻してきているのを発見しました。それに、小さな花が地面から生えているのも見ました。

月の女神様の様子を見ると、前より少し楽になった様子で、時々目を覚まして僕に笑いかけてくれました。

すこしずつでも結果が現れていることに、ぼくはもっともっと、やる気が出てきました。

そして、今回もまた、僕はいつもと同じように泉に足を入れて目を閉じました。

…しかし、これで最後となった泉の冒険は、僕にとって一番の試練になりました。

目を閉じてしばらくすると、風の音がしてきました。

風の音以外は何の音もしない、そんな中、目の前に現れた光景は、

誰もいない町に砂塵が吹き荒れている光景でした。立ち並ぶ家は焼かれたものも、壊されたものもありました。コンクリートの建物にはたくさんの銃弾がめり込んだ弾痕が残っていました。
そして、地面を覆いつくすように、倒れた人の体がたくさん残っていました。小指一つ動かさない、呼吸もしていない、灰色の服を着た白い顔の若い人間がたくさん、そこに…
…そこに、死んでいました。
僕は一気に恐ろしくなって、声を上げました。叫んで、目を開けようとすると、誰かに前から目をふさがれてしまいました。大きな手で力強く、その手は僕を振り切らずにしっかりと僕の目を閉じていました。
「よくあることだ。しっかりと見ろ。これが人間の『業』が現れた一番分かりやすい例だ。」
「…例？」
「戦争だ。」
「…せんそう？」
「そうだ。これは戦争でやりあった人間の骸が、葬られないまま放置された、戦争の直後の、捨てられた町だ。こんな場所でも、人は生き、そして死ぬ一瞬前まで誰かの大切な人であり、誰かを深く愛していた。今、見せてやる。」
聞きなれた声が、僕の頭の中で響いたと思うと、町のどこからか、人が一人、現れました。僕に近づいてくるその人は、何日か前、僕をここに連れてきてくれた、深い瑠璃色の瞳の男の人でした。
彼は、町で一番多くの人が死んでいるところに立って、一言、こう言いました。
「もう耐えなくていい。」
すると、打ち捨てられた骸の上にいくつもの「もの」が、浮き出てきました。まるで遺体の上に浮いているかのように、それらはたくさん、たくさん出てきました。
たくさんの「もの」は、いろいろなものがありました。

家族の写真、手紙、お酒の瓶や、たまに歌が聞こえてきたこともありました。
それは、この戦場で死んだ人たちが大切にしていたものや、死んだ人たちに託された想いでした。恋人の写真、手紙と一緒に封筒に入っていた、生まれたばかりの赤ちゃんの写真、お母さんから、寒くないようにと送られてきた手編みのセーター、友達から送られてきた故郷のお酒…。
「どうして？」
僕は、胸の中に湧き上がってくる感情が抑えきれなくなってきました。
「どうして死んでいるの？殺し合いをしたの？それくらい、相手が憎かったの？」
「そうかもしれない、でも、そうとも言えない。顔も知らない相手を簡単に憎めるはずはない。誰だってそうだ。でも、彼らは殺しあわなければならなかった。」
「どうして？こんなにいい物をたくさん持っているのに！」
「戦場で出会った敵の頭にこんなものが浮いていたら、まずは手に持った銃を撃てないだろうな。だから殺せるんだ。」
「…え？」
「戦争は、感情と感情のぶつかりあいではない。たとえ憎らしくなくても、何の恨みもなくても、相手が自分と敵対する国や民族に属している人間だったら、殺さなければならない。戦場では一人でも多くの敵を自分の目の前から消していかないと…殺していかないと、自分が危ない。だから、生き残るために人を殺すんだ。なのに、今殺そうという人間が、自分の尊敬できるような人間だと知ったらどうなる？相手は容赦なく自分に銃口を向けてくる。しかし、知ってしまった彼は、人間が本来持ちうる『愛情』という感情が芽生えてしまい、銃口を向けられなくなる。だから何も考えない。何かを考えながら戦おうとすれば確実に撃たれる。そんな世界だ。相手が人間だという、そんなことすら忘れてしまわなければ生き残れない。」

「そんな…。そんな世界に希望は…希望はあるんですか？」
僕は、大樹が心を閉ざしてしまった理由がこのときハッキリ分かりました。
これが『業』というもので、こんなに悲しくてひどいことが「珍しくない」世界。
その世界に月や星の光を投げかけても、バカバカしいだけだ。
「こんな世界に…希望はないよ。」
うなだれる僕に、瑠璃色の瞳の男性は、微笑みかけてはくれません。
「こんな世界、か。本当にこれが、この世界の全てだと思うか？」
「…え？」
「お前が今まで見てきたものは何だった？見た目だけでは分からない人間の心の奥底にある希望を見てきたんだろう。ならば、この残酷な戦場にも何かがあるはずだ。それを探せばいい。答えはいくらでもある。」
そう言って、彼はどこかへ消えていってしまいました。
この残酷な戦場にある「希望」…。
僕は、何がなんだか分からないまま、恐ろしい死体の山を見守っていました。まだ、たくさんの死体の上にいろんな映像が出たまま残っています。僕は、涙を拭きながらそれをひとつずつ見て回りました。
すると、どこかで声が聞こえました。
赤ちゃんの泣き声です。
僕は、目の前の映像を操って、その場所を探しました。
何時間探したでしょうか。町のはずれにあった若い男の人の死体の上に、元気な赤ちゃんが浮いていました。僕は、何故か許されたような気がして、その赤ちゃんに手を触れようと、手を伸ばしました。すると、僕の手を握り返したのは、僕よりもっと大きな手でした。その瞬間、僕の目の前のスクリーンは一気に変わって、一人の女の人が麦畑を見ている姿を映し出しました。おなかが大きくて、

僕はすぐに、この人がもうすぐお母さんになるんだと分かりました。
女の人は、麦畑を見ながら泣いていました。手には、軍隊からの手紙が握られていました。手紙には、「戦死」とだけ書いてあるのが見えました。
「泣かないで、キャサリン。」
泣いてばかりの女の人の周りに風が集まってきました。その風の中から、声がしました。
「泣かないで、キャサリン。僕はここにいるよ。分かるかい？ほら、いま、君のお腹を蹴っただろう。キャサリン、僕は君の子供になるんだ。だから泣かないで。もうこんな悲しい戦争はしないって、世界からはこんな悲しいことがいつかはなくなるって、僕は信じているよ。キャサリン、それは、生まれ変わった僕たちがやっていくんだ。だから、泣かないで。ぼくはいつも君の傍にいるよ。」
その声が話すのを聞いた直後、僕は、死んだ男の人の目の前ではしゃぐ赤ちゃんの元に戻っていました。そして、知らないうちに、僕の手には何かが握られていました。
僕は、ゆっくり目を開けました。
目の前には、瑠璃色の瞳をした男の人がいました。
「手を、開いてみるといい。」
そう言われて、僕は、自分の手を開いて、握っていたものを確かめました。
僕の手に握られていたのは、きれいな虹色をした香水瓶でした。
この瓶で、僕のやることはすぐに分かりました。
僕は、空っぽの瓶に泉の水を汲み取りました。そして、大樹の根元に行くと、その水を一気に根元に振り掛けました。
すると、どうでしょう。
今まで見たこともないくらい美しい光景が、僕の目の前で広がりました。
大樹の中心から光のようなまぶしいものが出て、大樹は根元から葉の一枚一枚まできれいな色を取り戻したのです。そして、一気に、

真っ白なきれいな花を枝の先にたくさんつけました。すると、一陣の風が吹いて、花は次々に散り、その花びらは風に乗って天に散りばめられて、きれいな夜空に輝く星になったのです。

花が散ると、今度は実ができました。

銀色のその実は、たくさんの枝にたわわに実りました。

僕と瑠璃色の瞳の彼は、二人で一緒に銀色の実を採って、絞ってジュースにすると、根元で眠っていた月の女神様に飲ませてあげました。すると、月の女神様はその美しさだけでなく、元気も取り戻して、僕に何度も「ありがとう」を言ってくれました。そして、女神様が眠っている間、ずっと草原からこの森を守って、女神様の受けた毒を進行させないようにがんばっていた地球に感謝をこめて、瑠璃色の瞳の男性に熱いキスをしました。

そうやっている間にも、木は、その実をすぐに成熟させて、十分に熟した実を地面に落として行きました。熟した実はたくさんの果汁を地面にいきわたらせました。こうして、銀色に染まった地面は、地上から見ると月に照らされて輝く銀色の夜光雲になったのです。

すっかり大樹が心を開いて、夜空に再び輝く星と月、そして夜光雲が戻りました。

地球と月の女神様は喜んで、僕の願い事を叶えてくれるといいました。

僕は、故郷に帰っても、お父さんもお母さんもいない、孤独な子供でした。

でも、僕はもう孤独ではありません。

僕は、大樹を見上げました。この数日間に大樹といろいろな話をして、いろいろなことを知りました。できれば僕は、僕が僕としての役目を終えるまでずっと、この大樹と一緒にいたいと思いました。

地球は、僕のその願いを聞いてくれました。

ねえ、だからね。
夜空を見上げるときは、夜光雲の隙間に、ぼくがいるかもしれないよ。
だから、ぜひ、時間が許すまで見上げてみて。
遠い空で、今も僕は大樹と一緒に君たちを、見守っているからね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6863i/

夜の木

2010年10月8日15時08分発行